

初年次教育改善への組織的展開 —学生の自己評価をPDCAサイクルに活用する試み—

○山田剛史・田中正弘・坂本一光
島根大学 教育開発センター
t-yamada@soc.shimane-u.ac.jp

大学教育学会第29回大会（東京農工大学）
2007年6月10日

1

1.問題意識①：なぜ、初年次教育に着目したのか？

◆大学界全体の動向（外的状況）

	ある		ない	
	ある	ない	ある	ない
実験・実習	77.2	22.8	演習や体験学習を主体とするプロジェクト型の科目	71.3 28.7
専門教育の入門・基礎科目	83.2	16.8	高等学校で必要科目を履修していない学生に対する補習科目	36.6 63.4
文書作成等の訓練	48.5	51.5	基礎セミナーなど大学での学修や生活へのガイダンス的な内容の科目	51.5 48.5
プレゼンテーションやコミュニケーション実習	64.4	35.6	学生同士が教え合うシステム（ピア・エデュケーション）を内包した科目	12.9 87.1

表 2-1 学力をどうとらえるか（市川, 2003, p.12）

	測りやすい力	測りにくい力
学んだ力	知識 (狭義の) 技能	読解力, 論述力 討論力, 批判的思考力 問題解決力, 追究力
学ぶ力		学習意欲, 知的好奇心 学習計画力, 学習方法 集中力, 持続力 (教わる, 教え合う, 学び合うときの) コミュニケーション力

他にも・・・

- ・大学のユニバーサル化
- ・認証評価等教育重視
- ・特色GP等での選定
- ・社会的／学生ニーズ
- ・大学教育学会等での研究等々・・・

2

1.問題意識②：本研究（調査）の射程・位置づけ

* 外的状況は、初年次教育に取り組む必然性を十分に指し示している。
↓しかし・・・

初年次教育は、導入される大学の状況や必要性に応じ
カスタマイズされる度合いが大きい(濱名, 2006)

- ・本当に自大学で必要なのか？
- ・どのような内容・形態が効果的なのか？

* (自大学における) **内的必然性**が示されなければ、**教員の協力**も得にくく、**徒労感**を増幅させることとなる。

★1を超えて、2のレベルで実践を展開していくためには、自大学の教育状況 (evidence) と、それに裏づけられた内的必然性を明示する必要がある。

★そこで、3に焦点を当てた調査を行う。

3. 大学初年時の教育（調査）研究

2. 学部・学科等複数の初年次教育実践・研究

1. 個別の初年次教育実践・研究

3

2. 本調査の観点と研究の目的

◆観点①：学生の視点

教育の成功・不成功は、教員が何を与えたのかではなく、学生がどう受け止め、彼らの中で体制化され、認識・行動レベルで保持されるのかによる。

→学生の**内在的視点**による教育評価（自己評価）が重要

◆観点②：教育効果と教育ニーズ

自身が受けてきた教育によって、どの程度個別的な力が身についたのかといった点から捉えつつ（教育効果）、その力の向上をどの程度大学教育に求めているのか（教育ニーズ）を併せて捉える。

→教育ニーズの高さは**学習意欲**にも関連

大学初年時の教育実態を、教育効果と教育ニーズの観点から捉え、その結果をもとに、自大学の文脈に即した初年次教育の組織的展開に向けて、学生の自己評価をPDCAサイクルに活用するための一視座を得ることを目的とする。

4

3. 調査の概要

◆調査対象者 島根大学1回生計926名

調査対象者の内訳(欠損値6名)						
学部	法文	教育	医	総合理工	生物資源科	計(%)
男性	79	53	26	251	109	518(56.3)
女性	104	91	79	46	82	402(43.7)
計(%)	183(19.9)	144(15.7)	105(11.4)	297(32.3)	191(20.8)	920(100.0)

◆調査時期 2007年1月下旬～2月上旬

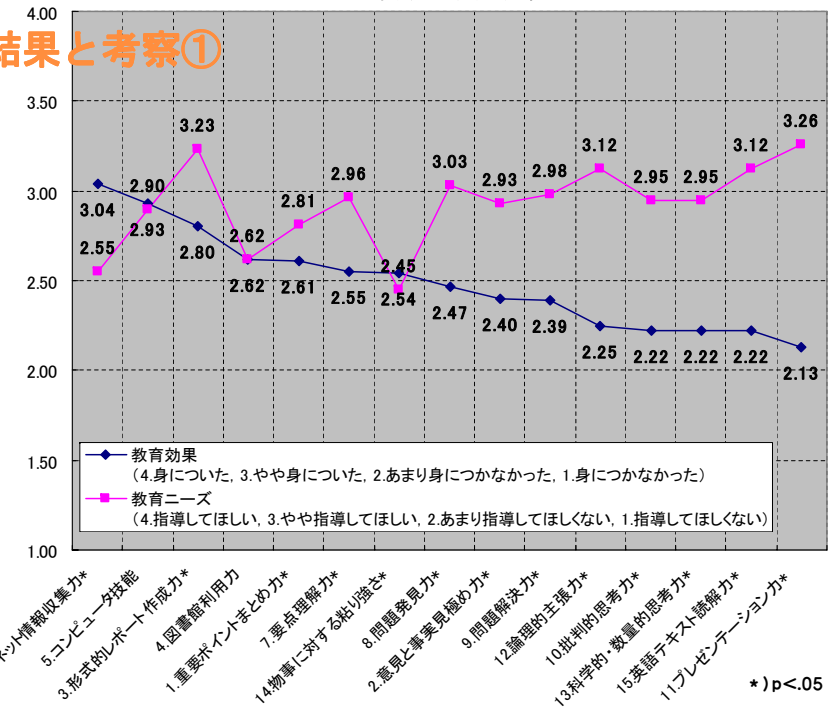
◆調査内容

①進路選択関連(9項目), ②教育効果とニーズ[スタディ・スキル(15項目), 大学に関する知識(8項目), 指導方法(10項目), 広義の学び(15項目)], ③入学後1年間の学習・生活習慣(23項目), ④入学後重視してきた活動(選択式), ⑤教養教育科目群に関する満足度と選択理由, ⑥授業以外の学生生活に関する満足度と選択理由

(注)なお,本調査項目の大枠は,私学高等教育研究所が2003年7月に実施した「一年次教育のニーズとプログラム評価に対する調査」,それをベースとして同志社大学教育開発センターが2004年度から実施している「キャンパスライフに関するアンケート調査」を参照し,2006年9月に本学で実施したプレ調査を経て,最終的に項目を設定している。

スタディ・スキルに関する教育効果とニーズ

4. 結果と考察①



*) p<.05

4. 結果と考察②

◆教育効果とニーズの分布

・平均値ではなく, 中央値で分割(4象限)

・個々の領域に, 固有の意味を付与し, そこに含まれる個別能力の意義を掴む

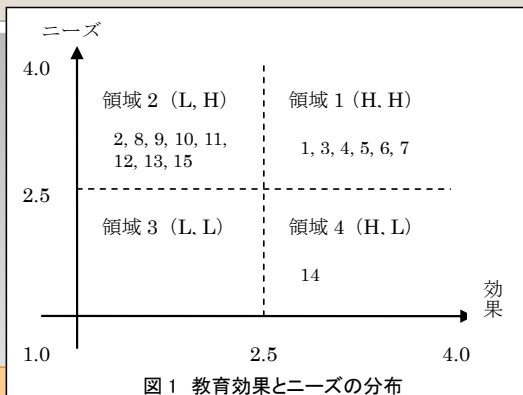


図1 教育効果とニーズの分布

領域1(効果H, ニーズH)

・(一般的に)望ましい・目指される領域/伸びやすい項目が布置

領域2(効果L, ニーズH)

・学士課程教育全体の中でつける必要のある力/学生への「気づき」を促す

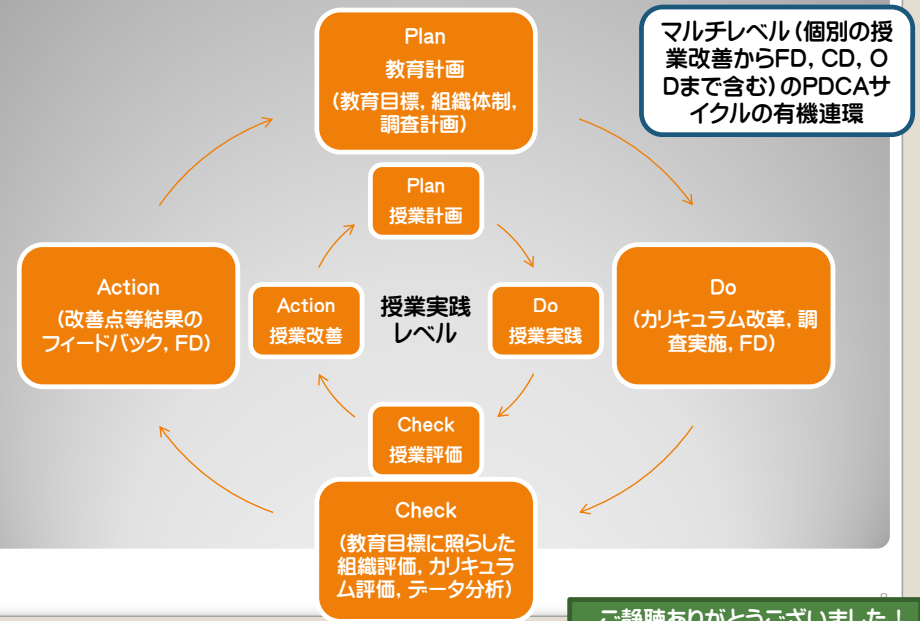
領域3(効果L, ニーズL)

・該当項目はない/不必要なものを峻別

領域4(効果H, ニーズL)

・自学自習で対応可/授業外で養われる可能性/正課外との連携

5. まとめ—PDCAサイクルに活用する試み



ご静聴ありがとうございました!